

第34回 高木はるゑさん

盛り絵職人、「技の伝承塾」「技の創造塾」講師



高木はるゑ先生

昭和7年、三重県桑名郡生まれ。終戦後、20歳の頃に名古屋市東区車道にあった上絵付け職人の工房に弟子入りし、以来20年間その工房で職人として働きました。当時の職人の世界は厳しく、最初の5、6年はひたすら絵具摺りをする毎日だったといいます。その後、昭和46年に独立。現在も自宅の工房で上絵付けを行っています。

略歴

昭和7年 三重県桑名郡に生まれる
昭和21年 尋常高等小学校を卒業
昭和23年 愛知県佐屋町の織物工場で働く
昭和26年 名古屋市東区車道の工房に弟子入り
昭和46年 独立
平成25年 名古屋陶磁器会館「技の伝承塾」講師を務める

『凸盛り』、名古屋文化遺産活用実行委員会発行
平成25年度文化庁「文化遺産を活かした地域活性化事業3頁より

——盛り絵職人に弟子入りしようと思ったのはなぜですか。

学校を卒業してから裁縫を習って、織物工場に住み込みで就職したんです。そのあと、名古屋の紹介所で仕事を斡旋してもらったのが親方のところでした。仕事を選ぶ余裕はありません。

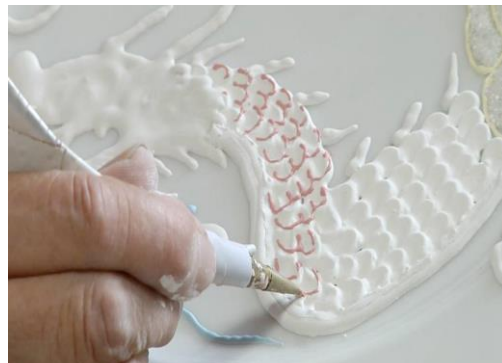
——最初の5、6年は絵具擦りの毎日だったんですね。

台白（だいじろ）と呼ぶ絵具と煮溶かしたふのりを擦鉢でひたすら擦る毎日でした。ダマが残らないように擦るのは力仕事です。台白が均一になるまで擦り続けます。それから水を入れて台白の固さを調整します。季節や気温、湿度

などの微妙な違いによって、固さを調整するため、長年の経験が要ります。台白が柔らかいと盛りがぺたーと低くなり、固いと穴に詰まってしまい描くことができません。



台白を擦る様子
(台白とふのりと水を混ぜる)



盛りを描く様子
(小さな穴から台白を絞り出しながら描く)

——台白（絵具）が擦れるようになったら、竜の絵を描かせてもらえるのですか。

描く前に、盛り絵の道具の扱い方を覚えます。道具をきちんと扱えなければ一人前とはいえません。道具の扱いが一番大事な仕事です。

まず、イッチン作りです。紙を織って絞り袋を作ります。これも、自分の手の大きさに合わせて使いやすい太さに織ります。この紙は牛乳パックやツルツルした広告紙を使っていました。これをカッパと呼びます。カッパの先に先金をはめて出来上がりです。先金の先も使うたびに、やすりで削って穴の大きさを調整します。小さな穴なので、詰まった台白は針で掃除しながら描きます。



カッパを織る様子



先金



カッパに先金を付けてイッチンを作る



先金に詰まった台白を掃除する様子
(「技の創造塾」講座にて)

——先生の技を習いたいという人がたくさんいらっしゃいますが、どのように思われますか。

講師として指導する機会が増えてうれしいです。私は竜の絵が専門だけど、若い人はいろいろな絵に挑戦して楽しいね。



高木はるゑ作「ガラス盛り竜」

- * 「業界人のお話」第34回 平成27年3月31日掲載
- * 「技の伝承塾」「技の創造塾」は、平成25年及び平成26年度文化庁芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）として名古屋陶磁器会館にて開催した講座です。名古屋の伝統上絵付技法のひとつである「凸盛り」「ガラス盛り（コラレン）」を後世に残し伝えることを目的に開講しました。